

日本語母語話者が類義語分析において行う対比とその特徴

坂 口 和 寛

要 旨

本研究は、非教師の日本語母語話者への調査で収集した類義語分析記述から、対比によって類義語対の特徴を明らかにする分析方法の実態を探った。類義語対「疲れる／くたびれる」の対比的分析では、両動詞が表す疲労状態という意味を中心に多面的に意味特徴が分析されるほか、用法面に焦点化した対比も見られた。一方、対比の手続きは、類義語対の共有特徴について程度差を探る「ものさし型」と、ある言語特徴の下位的な側面から類義語対の相違点を探る「スポットライト型」に大別できる。これらの手続きは、対比的分析で明らかにされる言語特徴と相互に関係し合う。また、程度差を強調するものさし型の対比は手続きとして容易だが表面的な分析となりうる一方、スポットライト型の対比では類義語対の弁別の特徴を示唆する分析が見られ、類義語分析に資する可能性がより高いといえる。

キーワード：類義語分析, 対比, 意味特徴, 日本語母語話者

1. 研究の背景と問題の所在

日本語教師（以下、教師）には、日本語を分析する必要に迫られる機会が多い。鈴木ほか（2008）では、「学習者が真に必要なと見抜いて、自分で言葉进行分析し、学習者のレベルに応じた的確に説明する方法を磨くこと」が教師にはたえず求められると指摘されている。そうした教師の日本語分析にとって重要な言語問題が、類義関係にある語句である。学習者の日本語能力が上がるにつれ、既習の語彙や表現文型と新出項目との類義性が問題となる。そのため、学習者だけでなく教師にも正確で深い日本語理解が求められ、類義関係が問題となる言語項目については自身で分析し特徴を整理する必要がある。

類義語分析においては、弁別的な特徴を見出すために、分析対象語同士を比較して共通点や相違点を探ることが不可欠である。比較や対比は、類義語にかぎらず、特定の語句进行分析する場合にも重要な手続きである。例えば柴田ほか（1976）は動詞の意味分析の手続きについて、「比較・対照ということがなければ、思うようにははかどらない」もので、「ある動詞を一つだけとりあげて、その意味を考えようとしても、それはてごたえのないわざである」と述べている。そこで柴田らは分析に際して「つねに、意味の近いことば（類義語）との比較・対照を考慮した」としている。また森田（1989）も、語義や用法の分析における効果的方法の「道筋」について、「ある一つの語をその語だけで考えるのではなく、分析するとき、その語と対応して逆の条件を満たすことばや、類似の条件構成をなすことばを同時に扱うということが肝要」だとしている¹⁾。以上の指摘は、比較や対比といった手続きは類義語分析

をはじめとした日本語分析にとって有用で、必要不可欠なものであることを示している。

類義語分析での比較や対比は、弁別的特徴の明確化という分析目標からも理にかなった自然な手続きである。しかしその一方で、対比の使用が類義語分析の成功を必ずしも保証しない可能性がある。坂口（2019）では、非教師の日本語母語話者による類義表現分析の記述をテキストマイニングの手法で分析し、記述に含まれる語句とその頻度に着目して例文分析と意味説明の特徴を探った。そのなかで、類義表現対の弁別的特徴を十分に説明できなかった分析者群の記述からは、対比を示す表現「の方が」が多く抽出された。このことは、日本語の専門的知識や分析技術を持たない日本語母語話者の場合、類義語同士の対比が効果的になされず、類義語分析の成功に寄与しないという可能性を示唆している。また、類義語分析での対比の活用は自然であっても、その手続きが一律でないことも考えられる。

ところが、日本語分析での重要性が指摘される対比は、実際の分析における活用方法とその実態は不明であり、具体的な手続きも明らかではない。また、坂口（2019）での類義表現分析記述の精査は、対比的な分析に焦点化したものではない。データ処理上、比較を表す格助詞「より」など、対比を示す言語要素を網羅的には扱っておらず、「の方が」という表現が使用された対比的分析の傾向を指摘しているにすぎない。類義語分析において対比を用いても弁別の特徴が明確にならない場合、その手続きにはどのような問題が生じているのだろうか。類義語分析において対比が有効に機能しない可能性があるならば、その問題に対処するためにも対比の手続きの把握が必要となる。対比的な分析の実態を把握するには、対比行動を明示する言語要素を手がかりに、類義語分析における対比を把握し、その手続きとその特徴を明らかにする必要がある。以上の課題に取り組むことで、類義語分析における対比手続きの効果的な運用方法と、それを支える分析技術の検討ができることとなる。

2. 研究の目的

本研究は、非教師の日本語母語話者が類義語分析において行う対比的な分析について、その類型と特徴、問題点を明らかにすることを目指す。特に、類義語対の差異や相違点を対比的分析で探る場合に焦点化され明らかにされる言語特徴と、具体的な対比方法を明らかにする。以上の点から、類義語の対比的分析において問題を生じさせる手続きや、対比的分析の効果的な運用を考える手がかりを得る。

3. 研究の方法

日本語母語話者への調査を実施し、類義語分析の記述をデータとして得る。比較や対照を表す語句を手がかりに、類義語対を対比して特徴や相違点を説明している箇所を分析記述から抽出し観察する。そして、対比的分析で焦点化される言語特徴とその説明内容、対比手続きに関して傾向や問題点を探る。以上の結果を基に、類義語の弁別的特徴を的確に見出すために求められる対比的分析の技術と、その効果的運用に関する留意点を検討する。

3.1 調査の手続き

日本語に関する指導や意識的な分析の経験がない日本人大学生40名を対象に、2018年7月から8月にかけて調査を行った。本研究では、日本語の専門知識や指導経験の影響を受けない類義語分析とそこでの対比的分析を観察する。日本語教育経験者の場合、外国人学習者への指導をふまえた分析となりやすく特殊性がある。また、熟達度の低い教師や養成課程の被養成者への応用につながるよう、調査対象者には非教師の日本語母語話者を選定した。

調査は以下の手続きで進められ、(2)の「類義語分析課題」によりデータを収集する。調査協力者には一組の類義語対を提示し、その分析と記述を求める。

(1)フェイスシートへの記入および調査内容の説明

(2)類義語分析課題：提示される類義語対の意味内容について分析し、調査用紙（A4紙1枚）に記述する（制限時間10分）。日本語学習者への指導は想定せず、自身にとって自然な形で自由な分析を求める。用紙には以下の指示文が記載されている。

提示された2つの言葉は、それぞれ、どのような意味を表しているでしょうか。
2つの言葉の違いがわかるように説明してください。

3.2 調査に用いる類義語対

中級以降の学習段階で類義関係が問題となる動詞「疲れる」「くたびれる」を取り上げる。類義語分析課題の記述に見られる対比的分析の妥当性が確認できるよう、両語の弁別的な言語特徴を以下のように整理した²⁾。なお、意味以外の言語特徴についても、両動詞の弁別にあって重要で、調査協力者が言及する可能性があるものを取り上げている。

＜基本の共通意味＞体の使いすぎなどで元気の出ない状態になる

「疲れる」

- (1)肉体面：極度の、または長時間の労働・運動や緊張の結果、体力を消耗して肉体や筋肉が（体全体もしくは部分的に）だるくなる
- (2)精神面：気分・精神力の低下や精神的打撃により、体や頭を働かす気持ち・やる気が失われる状態となる。生活や人生について、生きがいや張りをなくした状態
- (3)比 喩：長時間の使用により（使い古されて）物の質や働きが低下・悪化する
変化が見た目に分からないものにも使用可能（油・土壌・金属・機械など）
- (4)用 法：一般的・普通の表現。「くたびれる」より用法が広い

「くたびれる」

- (1)肉体面：長時間・長期の労働や肉体的疲労が続いた結果、体が疲れきり、元気を失う。
休んでもしばらく回復しないという印象がある
- (2)精神面：精神面での倦怠感。同じ状態が続いて飽きる・うんざりする・嫌気が差す
- (3)比 喩：見た目に使いすぎとわかる様子。使い古されて働きが悪くなる
※衣服など、長く使って古ぼけ、張りがなく形の崩れた様子
- (4)用 法：口語的表現
- (5)フォーマリティ：やや俗語的な日常語、ややくだけた表現

4. 結果

調査で得た類義語分析の記述をデータとし、対比を用いて類義語対の特徴を説明している

箇所を特定し分析する。本研究では、対比的分析を示す言語マーカーとして11種の語句に着目する。なお「のほうが」と「の方が」など、同一表現で表記が異なる場合は以下の表記で統一的に扱う。

〔対比的分析の言語マーカー〕

- ・助詞（複合形式を含む）：より³⁾／よりも／よりは／よりか／の方が／の方は
- ・副詞：より
- ・接続表現：対して／それに対して／一方／～のに対して

助詞は格助詞「より」を基本に、他の助詞が付加した複合形式や助詞相当句も含める。また、副詞としての「より」は格助詞と区別して扱う。接続表現については、接続詞として単体で使われるものと、接続助詞のように複文の前件節に使用されるものを含む。以上の言語マーカーを手がかりに、類義語対を対比して分析している箇所を記述内から特定した。調査協力者が行っている対比的分析は、分析の内容と手続きの二点から特徴が整理できる。

4.1 対比的分析の対象となる言語特徴

4.1.1 意味特徴に焦点化した対比的分析

対比的分析で焦点化される言語特徴は、意味内容とそれ以外の事象に大別できる。意味特徴に焦点化した対比的分析は具体性に差異が見られる。なお、これ以降例示する調査協力者の記述は、四角（□）で囲まれた語句が対比の言語マーカーを、下線部分が対比的分析のなされている箇所を示す。なお下線のない記述例は、抜粋部分全体が対比的分析である。

〔意味範囲〕類義語対が表す意味を全体的にとらえて広さを比較しているものである。以下の二例では、「くたびれる」の意味の広さに言及されている。協力者17は、植物の描写にも使用できることから「疲れる」より意味が広いとしている。逆に30は「疲れる」より意味が限定的としている。意味の広さに着目した類義語対の対比は、意味内容の捉え方が大まかで具体性にやや欠ける抽象的な分析といえる。

（例1）「くたびれる」は人間でなくても、植物がしおれている時などに「くたびれている」と言うことができることから「つかれる」よりも意味が広く、見た目の状態を重視している。〔協力者17〕

（例2）「くたびれる」
「つかれる」よりも限定的な意味をもつ。広い意味での「つかれた」状態をくわしく伝えたい時に使う。〔協力者30〕

〔状態の視認性〕類義語対が表す疲労の状態が外面に現われて視覚的に認識できるか否かという点から、両語を対比しているものである。例3と4では、共に「くたびれる」が表す状態変化が「疲れる」より外面的で、具体的な様子が視覚的に捉えられる点を対比し述べている。

（例3）「つかれる」というのは、精神的・体力的な側面についての状態を表現するときに用いるイメージがある。それに対して、「くたびれる」という言葉は、外から観察したように、外面を評価した場合に用いられる気がする。前者が主観的な感情だとすれば、後者は客観的な印象を表しているように思う。〔協力者29〕

（例4）人間では「人間関係につかれた」などというように或るものとや人に振り回

されたりして、もう関わりたくないなどの意味。「勉強につかれた」というように頭を使いすぎたときも、「くたびれる」はより外部に現われるようなひゆ的な印象。「花がくたびれる」とは言うけれど「花がつかれた」とは言わない。気力が抜けてしまった感覚。力が入らない。 [協力者35]

また協力者23は、「疲れる」に比して「くたびれる」に「やつれた印象」が生じるとしている(例5)。「やつれる」が表す変化は視覚的に捉えられるものとして、例3および4と同様に、疲労状態が目に見える形で外面に現れている様子が説明されているといえる。

(例5)「くたびれる」は、「つかれる」よりも使用される機会は少なく、疲労の程度が「つかれる」よりは大きく、ただ「つかれる」というよりも、やつれた印象を与える。 [協力者23]

以上の分析例では、類義語対の意味特徴が大まかに説明されている。それに対し、具体的な意味内容について対比しているケースもある。特に、疲労状態という「疲れる／くたびれる」が共有する意味内容に焦点化して対比がなされており、その切り口も多様である。そうしたなかでも弁別の特徴に関わっているものが、[疲労のタイプ]に焦点化した対比である。[疲労のタイプ] 類義語対が表す疲労の質的な違いから、両語を対比しているものである。具体的には、疲労が肉体的なものか精神的なものかという違いや、疲労の生じた身体箇所の異なりに着目している。例えば、調査協力者25は「疲れる」が相対的に精神的疲労を示すことを(例6)、例7の協力者32は「くたびれる」が身体的疲労を示すことをそれぞれ指摘している。いずれも類義語対の弁別性を疲労の質的な違いに求めており、同様の特徴づけがなされている。

(例6)「つかれる」は「くたびれる」よりも精神的疲労を感じた際に使われる場合も多く、より一般的に用いられる言葉である。 [協力者25]

(例7)「つかれる」は精神的なダメージをうけたときを含みますが、「くたびれる」は身体的なダメージをうけているときにより使うように思います。 [協力者32]

また例8と9は、疲労の生じる身体部分に着目した対比である。協力者34と38は共に、「疲れる」が体の特定部分に生じる疲労を表し、「くたびれる」が体全体に生じる疲労を表すということを述べている。

(例8)「疲れる」は、体の或る部分を使用しすぎて反動が来た感じ。必ずしも物理的な疲労を表すわけではない。(精神が疲れる等) 対して「くたびれる」は、全体的なダメージを表すかんじ。 [協力者34]

(例9)「つかれる」は激しい運動をしたあと、長時間勉強や仕事をしたあとなどの体のしんどさなどを表現する時に使う。また、勉強をしたあとには「頭がつかれる」、ものを書いた時には「手がつかれる」など、部分的なしんどさを表現できる。
<中略>

また「つかれる」と異なり、部分的なしんどさよりも体全体の疲労感を表現することが多い。 [協力者38]

[疲労状態の主体] 類義語対が表す疲労状態の主体の違いから、対比しているものである。協力者8は例10の記述に先立ち、「疲れる」の意味内容を「元気がなくなっている様子。疲労している状態」と説明している。そして、これに対照させる形で「くたびれる」が人でな

く無機質な物に元気やハリがない状態だと分析している。協力者21の分析（例11）でも、「疲れる」に比して、「くたびれる」の表す状態の主体が人から物や生物まで範囲が広いことを指摘している。また二例とも、主体の違いと疲労状態の違いを関係づけた分析となっている。

（例10）こちらは人などが疲労している状態より服などがよれている状態、つまり無機質な物に元気が無い、ハリが無いときを指すイメージ。「つかれる」を服などに使うよりは「くたびれる」を使う気がする。 [協力者8]

（例11）「つかれる」は、主に人間が何か作業をしたり頭を使うなどをして、体や精神に、負担を感じたさまを表す語である。一方「くたびれる」は、人間に限らず、何か物や生物が原形をとどめず、生き活きとしていない状態を表す語である。

[協力者21]

状態主体に焦点化した対比は、共起制限の分析と近接する。例えば協力者19は、類義語対の使用される対象について「人」もしくは「植物や服」という形で対立的に捉えている（例12）。また例13の協力者40は、「疲れる」が人の身体に、「くたびれる」が人体ではない物にそれぞれ用いられると述べている。二例の対比は共に、類義語対が表す疲労状態とその主体がそれぞれ異なることを説明しているが、共起制限への言及ともとれる。

（例12）どちらもストレスや無理などによって元気が無い状態を意味している「つかれる」は人、「くたびれる」は人よりも植物や服などに使うような印象がある

→「くたびれる」よりも「つかれる」の方が日常的によく使う [協力者19]

（例13）「疲れる」は「手が疲れる」や「頭が疲れる」というように、体の一部と共に使われる。一方、「くたびれる」は「くたびれたTシャツ」というように体以外と共に使われることがある。 [協力者40]

【疲労の程度】類義語対が表す疲労の程度について、その大きさや強さを対比しているものである。例14のように疲労度に焦点化した分析のほか、元気の有無（例15）や「ダメージ」の大きさ（例16）、体力やエネルギーの消耗度（例17）を対比的に分析しているものも「疲労の程度」として扱う。なお例16は「くたびれる」の分析である。

（例14）どちらも疲労した状態を表わす言葉であるが、「くたびれる」の方がその度合いは強いように思われる。 [協力者6]

（例15）「つかれる」よりも「くたびれる」の方が、元気がより無い感じがする [協力者19]

（例16）程度的にも「つかれる」よりもダメージが大きいときにつかうと思います。 [協力者32]

（例17）「つかれる」と「くたびれる」はどちらも、体力、もしくは気力を消費してしまった状態を表しているが、どちらかという「くたびれる」の方が、その程度が大きいイメージ。 [協力者20]

【疲労原因の時間的長さ】類義語対が表す疲労状態の原因となるストレスなどが継続する、時間の長さを比べているものである。例18では「くたびれる」について、精神や肉体に負荷のかかる時間が「疲れる」より長いとされている。例19は「くたびれる」の分析で、疲労状

態の原因であるストレスを受ける時間が相対的に長いことを説明している。

(例18) 長時間の精神・肉体負荷にさらされた際は「つかれる」より「くたびれる」を使用する人が多い。 [協力者9]

(例19) ストレスのかかる時間がより長いイメージ [協力者2]

以上のように、調査協力者は対比的分析によって、類義語対の意味を全体的に捉えて差異を探ったり、より具体的な側面に焦点化して類義語対の意味内容を対比し相違点を探ったりしている。そうした分析の一方で、意味内容と異なる言語特徴に関しても、対比的な分析がなされている様子が分析記述には見られた。

4.1.2 意味以外の言語特徴に焦点化した対比的分析

調査協力者は、類義語対「疲れる／くたびれる」の実際の使用に関する特徴や、使い分けに影響する言語的性質についても対比的に探っている。そうした用法特徴の一つが「使用頻度」である。

【使用頻度】 使用の機会や頻度の差異について類義語対を対比しているものである。協力者23は、「疲れる」より使用機会が少ないという点で「くたびれる」を特徴づけている(例20)。また、協力者8も使用頻度に類義語対の差異を求め、疲労状態の類似性に触れつつ「疲れる」の相対的な頻度の高さに言及している(例21)。

(例20) 「くたびれる」は、「つかれる」よりも使用される機会は少なく、疲労の程度が「つかれる」よりは大きく、ただ「つかれる」というよりも、やつれた印象を与える。 [協力者23]

(例21) 「つかれる」元気がなくなっている様子。疲労している状態。「くたびれる」と状態は似ているがこちらの方がより多く使われるイメージ。 [協力者8]

【日常性・一般性】 類義語対の使用に関する一般性や日常性に着目して両語を対比し、使用に際しての特殊な制約の有無や、普段使いの言葉であることを述べている。以下の二例では、「くたびれる」に比して「疲れる」の使用が日常的もしくは一般的であると説明されている。こうした日常性などには、「疲れる」が示す疲労状態の性質が関連づけられている。

(例22) 「つかれる」は「くたびれる」より日常的に使われる語、肉体的疲労にも精神的疲労にも使用される。 [協力者24]

(例23) 「つかれる」は「くたびれる」よりも精神的疲労を感じた際に使われる場合も多く、より一般的に用いられる言葉である。 [協力者25]

日常性や一般性はその言葉の使いやすさと関わり、使用頻度にもつながる。例24では、「疲れる」の日常性ととも使用頻度の高さが指摘されている。さらに、「くたびれる」と異なり主体が人であることが、「疲れる」の日常性に関わっているとも分析されている。

(例24) 「つかれる」は人、「くたびれる」は人よりも植物や服などに使うような印象がある→「くたびれる」よりも「つかれる」の方が日常的によく使う [協力者19]

【使用範囲】 使用できる場面などの広さの点から類義語対を対比しているものである。協力者32の分析では、「くたびれる」が使用できる状況が「疲れる」より限定的とされている。ここでの使用範囲への言及は、「疲れる」の一般性とダメージの種類をふまえた対比と推察できる。

（例25）つかれるは一般的に使うかなと思います。意味としては身体的、精神的にダメージをうけていることです。「くたびれる」は、「つかれる」よりか状況が限定されていると思います。【協力者32】

また例26では、「疲れる」の使用範囲の広さが言及されている。協力者37はこれに先立ち、例文「人間関係に」に後続させた場合の類義語対の文法性を確認し、「くたびれる」が非文法的であるとしている。そうした分析をふまえての、使用範囲の対比である。

（例26）「つかれる」の方が使うことができる範囲が広い…？ 【協力者37】

【評価性】類義語対が表す肯定的もしくは否定的な意味合いに着目して両語を対比しているものである。例27では、「疲れる」に比して「くたびれる」が否定的評価性を有すると説明されている。

（例27）「つかれる」よりもややネガティブな印象 【協力者2】

【フォーマリティ】形式的かくだけているかという点から類義語対を対比しているものである。例28では、「くたびれる」の相対的なフォーマリティの低さが言及されている。

（例28）「くたびれる」→「疲れる」よりもくだけた表現 【協力者33】

4.2 対比的分析の手続き

前節までは、類義語対の言語的特徴に関する説明の内容から、対比的分析の実態を観察してきた。一方で、対比の手続きに関しては二つのタイプが認められ、本研究ではそれらを「ものさし型」の対比と、「スポットライト型」の対比とする。いずれもある観点に基づく類義語対の対比だが、そのなされ方が異なっている。

「ものさし型」の対比は、焦点化した言語特徴についての程度差を明らかにし、類義語対を特徴づけようとする手続きである。ものさし型では、一本の定規の上で複数の物を測るように、言語特徴を線条的に捉えて、その大きさや多さ、強さや高さなどから類義語対を相対化する。例えば、先に見た例1と2、14から17はものさし型の対比の典型例でもある。また例29では、疲労度という意味特徴の単純比較によって類義語対が相対化されている。

（例29）「くたびれる」の方が「つかれる」よりも度合いが高い（つかれてる度）

【協力者37】

ものさし型の対比では、類義語対が共有していると分析者が考える言語特徴が焦点化され、強弱や多少、大小といった程度差で特徴づけられる。こうした対比によって、意味内容や使用頻度、フォーマリティ、日常性、評価性などが分析されている。

第二のタイプである「スポットライト型」の対比は、焦点化した言語特徴の有無や違いから類義語対の相違点を探る手続きである。焦点化する言語特徴が対比的分析における大枠となり、そこに含まれる下位的な特徴を探ることで類義語の違いを明らかにしていく。スクリーンや壇上の特定箇所照明が当たってその部分が明らかになるように、分析の基準となる言語特徴に関わる類義語対の相違点が明確化される。そのためスポットライト型では、線条的ではなく、非連続的で二項対立的に捉えることのできる言語特徴が対比の対象となる。「疲れる／くたびれる」の場合は、疲労のタイプに関する相違点が強調されやすい。例えば、先に挙げた例7と9、12はスポットライト型の具体例でもある。また以下の例30において協力者32は、「くたびれる」が示す老化現象という意味が「疲れる」にはないことを指摘して

いる。また例31では、疲労の原因である精神や肉体への「負荷」という大枠の中で、時間と強度という違いにより類義語対が特徴づけられている。

(例30) 程度的にも「つかれる」よりかダメージが大きいときにつかうと思います。「くたびれる」は「つかれる」よりも老化しているというような意味あいがあると思います。 [協力者32]

(例31) 長時間の精神・肉体負荷にさらされた際はつかれる、よりくたびれるを使用する場合が多い。強度（時間ではなく）の精神・肉体負荷にさらされた際は多くくたびれるを使用する訳ではない。 [協力者9]

以上のように、「ものさし型」の対比的分析では共有特徴に着目して類義語対を相対化し、「スポットライト型」では差異化や相違点の明確化を行う。そして、類義語分析でなされる対比の手続きが異なる場合には、焦点化される言語特徴も異なる。

5. 考察

調査協力者による類義語対「疲れる／くたびれる」の対比的分析について、分析内容と手続きの面から特徴を整理した。その結果、対比により明らかにされる言語特徴と、対比の手続きとの間には相互関連性が窺える。そのため、焦点化される類義語対の言語特徴と二種類の対比手続きを総合的に捉えることで、対比的分析の特徴と問題点が明らかにできる。

まず、対比的分析では、同一基準で程度性を比較できる言語特徴に焦点が当たりやすい。「疲れる／くたびれる」の場合、意味面では疲労度や疲労原因の時間的長さが、用法面では使用頻度や評価性、フォーマリティが該当する。これらの特徴は線条的に捉えることができ、程度の比較が容易であり、直感的にも差異化しやすい。この点から「ものさし型」での対比的分析が使用されやすく、類義語対が共有する特徴についての程度差が明確化されることとなる。特に、調査協力者の対比的分析では、疲労度の大きさに関する「くたびれる」の弁別性への言及が見られた。半面、ものさし型による程度の単純比較では類義語対の弁別性が十分に明確化できず、曖昧さや不明瞭さが残る表面的な分析となる可能性もある。例えば、「疲れる／くたびれる」について意味や使用の範囲の広さが対比で把握できても、両語の弁別性が明らかになったとは言いがたい。そのため、程度性の単純比較から分析をさらに発展させることが、弁別性の明確化に必要となろう。また、類義語対が共有していない言語特徴や、程度差に弁別性を求めにくい言語特徴の場合は、単純比較が分析の妥当性を損ねる可能性もある。調査協力者は時間的長さや使用頻度、評価性についてもものさし型で対比していたが、これらは「疲れる／くたびれる」の弁別性にとって重要度が低い特徴であり、類義語分析に資するところは小さい。

「疲れる／くたびれる」については、疲労状態という共通する意味に焦点化し、程度性ではなく質的な相違点を見出している対比的分析も見られた。そして、そうした疲労状態に関わる諸特徴は、「スポットライト型」の対比によって明確化されやすいようである。スポットライト型の対比では、焦点化した言語特徴の下位的な側面から、二項対立的に類義語対の相違点を探る。「疲れる／くたびれる」の場合は、疲労状態のタイプや視認可能性、疲労状態の主体、疲労が生じる身体部分といった特徴に焦点が当たっている。そして、それぞれの

特徴に関する下位的な具体的事象から、類義語対を対比して特徴づけている。調査協力者の分析では、「疲れる」については精神的疲労、人の疲労状態、身体部分の疲労といった弁別性が、「くたびれる」については肉体的疲労、物の状態を示すこと、疲労の様子が外から窺い知れること、身体全体の疲労といった弁別性がそれぞれ説明されている。任意の言語特徴を基準として類義語対を対比するという点は、ものさし型もスポットライト型も変わりはない。一方で、共有特徴の程度差を強調するものさし型に比べ、類義語間の相違点を強調するスポットライト型の場合は明らかにされる意味特徴が幅広く、類義語対の弁別性に関わる分析も多く見られる。

調査協力者の分析記述には、意味の面とは別に、使用の頻度や日常性、一般性、フォーマリティといった用法面に焦点化したものさし型の対比的分析が見られた。日常性とフォーマリティは「疲れる／くたびれる」の弁別性に関わるが、否定的な状態変化を表す両動詞は評価性から相違点を見出しにくい。一方で、用法面への焦点化は本研究における類義語分析課題の目標から逸れている。こうした対比的分析の背後には、意味の面から類義語対の相違点を見出すことの困難さが関わっていると推察できる。さらに、使用に関わる諸特徴が、ものさし型の対比で程度差を単純比較しやすいことが誘因とも考えられる。

調査協力者が対比的分析によって明らかにした類義語対の言語特徴と、二種類の対比の手続きは相互に関係し合う。また、ものさし型およびスポットライト型の対比的分析には、それぞれ、類義語分析における強みや弱みがある。本研究で得た「疲れる／くたびれる」の分析記述とその観察からは、ものさし型の対比に手続き的な容易さが認められ程度差に弁別性を見い出せる場合には有用である一方で、スポットライト型の対比によって相対的に類義語対の弁別的特徴が明確化されやすいことが指摘できる。

6. おわりに

本研究は、非教師の日本語母語話者である大学生40名に調査を行い、収集した類義語対「疲れる／くたびれる」の分析記述から対比的分析の実態を探った。類義語対が表す疲労状態を中心に様々な側面から意味特徴が対比されていたほか、用法特徴に関する対比も見られた。また対比の手続きについては、程度差を探る「ものさし型」と、ある言語特徴の下位的側面に見られる相違点を探る「スポットライト型」に大別でき、特に後者では類義語対の弁別的特徴に言及する分析がより多く見られた。

本研究は、類義語分析の成否とは切り離れた形で対比的分析の特徴を探っており、類義語分析での効果的な対比の方法は十分に検討できていない。そのため特に、本研究で把握した二つの手続きを類義語分析の成否と関係づけて、対比的分析の有用性を明らかにする必要がある。以上の課題の解決にあたっては、分析対象とする類義語対を増やす必要もある。その際には、程度性からの対比のしやすさを勘案して選定することも重要となる。さらに、対比的分析を抽出する手がかりとした言語マーカーについても再検討の余地がある。調査協力者の記述には「くたびれる」について『『つかれる』の中でも特につかれている』（協力者2）とする対比が見られたが、こうした語や句としての言語マーカーでは捉えることの難しい対比は研究対象から漏れている。また本研究では、言語マーカーが明示する対比的分析を対

象としたが、それらは類義語分析において局所的に見られるものであった。一方で、見方を変えれば、類義語分析それ自体が全体として比較や対照である。類義語分析の成否や全体的な流れ、さらには手続きとの関わりをふまえ、対比的分析の特徴や問題を明らかにする必要がある。以上の点が本研究で十分に取り組みなかった問題であり、対比的分析の全体像を把握するための課題として残されている。

注

- 1) 同時に扱うべきことばの例として、森田は対義語や類義語、自動詞に対する他動詞を挙げている。
- 2) 調査協力者が行う類義語の対比的分析の内容を検討する際のポイントとなる言語特徴は、以下の文献を参考に整理した。
 - ・『基礎日本語辞典』（森田良行、角川書店、1989年）
 - ・『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』（田忠魁・泉原省二・金相順編、研究社、1998年）
 - ・『新装版 使い方の分かる類語例解辞典』（小学館、2003年）
 - ・『ちがいがわかる 類語使い分け辞典』（松井栄一、小学館、2008年）
- 3) 分析記述において着目する対比の言語マーカーは、類義語対とは異なる対象の説明にも用いられていた。例えば以下の例にある「の方が」は、類義語対ではなく、「くたびれる」を用いる年齢層を対比している。このように、言語マーカーが使用されていても類義語対の対比的分析でない場合は、本研究では分析の対象としない。

(例)「くたびれる」:「つかれる」よりもしんどい。若者より年配者の方が使う。[協力者22]

付 記

本研究の調査にご協力くださった皆様に心より御礼申し上げます。なお本研究は、日本学術振興会科学研究費助成事業・学術助成基金助成金〔基盤C：課題番号17K02850；研究代表者・坂口和寛〕の助成を受けて行われました。

引用文献・参考文献

- 市川保子（2018）『日本語類義表現の使い方のポイント—表現意図から考える』 スリーエーネットワーク
- 倉持保男（1986）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』第5巻第9号 明治書院
- 鴻野豊子・高木美嘉（2016）『新人日本語教師のための授業づくり練習帖』 翔泳社
- 坂口和寛（2000）「類義語分析における日本語教師の意味分析ストラテジーの特徴—類義副詞の意味へのアプローチ」『信州大学留学生センター紀要』第1号 信州大学留学生センター
- 坂口和寛（2019）「類義表現分析において日本語母語話者が行う意味特徴説明」『信州大学人文科学論集』第6号 信州大学人文学部
- 柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進（1976）『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』 平凡社
- 鈴木智美・春原憲一郎・星野恵子・松本隆・榎山洋介（2008）『ことばの説明・文例集 この言葉、外国人にどう説明する？』 アスク出版

- 建石始（2018）「類義語分析のためのチェックリスト」岩田一成編『現場に役立つ日本語教育研究
6 語から始まる教材作り』くろしお出版
- 森田義行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- グループ・ジャマシイ編（1998）『教師と学習者のための日本文型辞典』くろしお出版

（2019年10月31日受理，11月15日掲載承認）